

教育からの脱出

巻頭言

たにおか くに こ
谷岡 郁子

私の教育について語れ、という要請に応えるのは限りなく困難に感じられる。教育ということばに私自身が不信感をもっているのだ。教えるのは教師で育てるのも教師なのだから、教育ということばの主体は教師になる。すると学生・生徒は客体になってしまう。それは違うと言いたいのだ。本来の主体は学生・生徒なのに、それを教師本位にしてしまうから歪むのではないだろうか？こんなことを考えてしまうから私はどうしても立派な教師にはなれないのだ。こう思いながらいつのまにか25年経った。

当初は教えたことがたくさんあるように思えた。しかし、だんだん教えるということが無意味に思えるようになった。相手が自らの存在とつなげられない知識は宙に浮いたものでしかないからだ。それよりも心を開いて語りかけ、挑戦を促し、学生が自ら動きだすときに生まれる飢餓感に手掛かりを与えることで対処し、期待しつつ信じて見守り、エールを送るということが私の習慣となっていた。

私は、人は自分が学ぼうとすることしか学べないものだと思う。だから知識を教えるより学ぶ姿勢を創り出すことに意味があるし、学び方を学ばせるのが大学だと考えるのである。学生の個性はさまざまだから、どうやればいいのか一概には言えないのだが、とにかく本気で骨身惜しまず付き合うしかないと思う。よくしたもので、こっちが試行錯誤していても、学生のほうが自分に必要なことを発見し、取捨選択しながら吸収して成長してくれるようである。

吉田、伊調姉妹の女子レスリング3選手など、「メダルなんてどうでもいいからケガしないでね」だけ言い続けて、あとは監督たちに任せっぱなしにしたら全員メダルを獲った。要するに、教育はやり過ぎないようにと思う私は怠け者？

■プロフィール ●1954年大阪府生まれ。中京女子大学学長。高等教育機関のあり方を脱教育学的視野で見つめ、学校デザインのあり方と制度デザインの問題を追求している。文部科学省科学技術・学術審議会委員、国土交通省国土審議会（近畿・中部圏整備分科会）特別委員、国立大学法人名古屋工業大学経営協議会委員、IAUP (International Association of University Presidents) 理事等を務める。著書・論文に「近代女子高等教育機関の成立と学校デザイン」「近代女子高等教育とキャンパスデザイン」等。